



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	民国後期地方政府の近代化建設研究：福建省と台湾省における陳儀の施政について [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	湯, 武; Tang, Wu
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(法学)
Dissertation Number	甲第12930号
Issue Date	2017-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68133
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Wu_Tang_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（法学） 氏名 湯 武

審査担当者 主査 教授 遠藤 乾
副査 教授 岩谷 將
副査 教授 松浦 正孝（立教大学法学部）

民国後期地方政府の近代化建設研究 ——福建省と台湾省における陳儀の施政について——

本博士論文のテーマは、陳儀という中華民国期の軍人・政治家・実務家である。彼は、日本留学の後、袁世凱などに仕え、のちに蒋介石に重用されて福建省主席、台湾省行政長官を歴任した人物である。全 258 頁、序論結論を含め 10 章に上る本論文は、この陳儀の人生を追跡し、理念や人脈を確認した後、福建省主席と台湾省行政長官としての陳儀の施政を分析した。福建省と台湾省は日本的な感覚からは地方政治の場であるが、高度な独立性を備え、一国に相当するような施政が展開される場だった。陳儀を扱うことで、本論文は、清末から中華民国、そして中華人民共和国成立に至る時期の中国の近代化、民主化、植民地化を論ずることになる。

本論文の意義は 3 つにまとめられる。第 1 に、陳儀の人生・経歴・人脈・理念を出自から留学時代を含めて丹念に追跡し、福建や台湾などの地方政府次元の政治過程との関連を分析した。陳儀は、日本やドイツで近代化を学び、独立性の高い自治単位の省において、個人的関係で結ばれた近代的統治エリートを集めて集権化を試み、既存の土着勢力の利害共同体と対峙し、経済の統制を図ることで、近代建設を追求した。本論文は、この過程を、とりわけ人事や組織の詳細な解析を通じて丹念に追跡した。近代化テククラートとしての陳儀の成功と失敗の分析を通じて、民国の近代化、国家建設の過程を具体的に明らかにしたことが、第 1 の意義といえる。

第 2 に、毀誉褒貶の激しい陳儀について、新たな評価を与えた。陳儀を最も有名にし、また悪名高くしているのは、2・28 事件である。これは、戦後直後の 1946 年、陳儀施政下の台湾で起きた暴動・鎮圧事件で、数千人に上る台湾人が国民政府によって殺害された事件である。これにより、台湾本省人（民進党系に重なる）の視点から見れば陳儀は極悪の独裁者ということになった。他方、国民党系の外省人の視点からすると、陳儀は、福建や台湾の省主席を務めた高官で、福建時代については一定の評価がある一方、最終的には共産党政権との内通を疑われ、蒋介石によって処刑された裏切り者である。陳儀の歴史的評価はそうした党派的な立場に制約されていた。本論文は、日本留学期、革命期、福建統治期、台湾統治期にまたがる陳儀の人生を追うことで、客観的かつ統一的な評価を試みたところに特色がある。とりわけ、政治的な集権と経済的な統制の組み合わせによる福建統治における業績から台湾統治期を説明するオリジナルな視角が、分析に奥行きをもたらすとともに、日本の植民地支配下で近代化が進展した台湾省の社会構造から 2・28 事件を説明する点で新たな解釈が与えられている。

第 3 に、陳儀というこれまで正面からきちんと扱われなかった人物を扱うことで、中国近代史のみならず日本近代史の未解明の部分に光を当てた。陳儀は、日本の陸軍士官学校・陸軍大学校に最も長く留学した知日派軍人であり、その分析は日中軍事交流の実態を明らかにすると共に、彼が知日派として蒋介石に重用された意味をも明らかにした。彼が福建省・台湾省という日本帝国と対峙する要衝のトップに起用されたのは、日本を知悉しうまくあしらいつつ、しかも取り込まれずに統治を固めるだけの知識と人脈と経験を持っていたためである。日本帝国は満洲・華北

からのみならず、台湾・福建からも中国侵攻を試み続けた。陳儀が台湾海峡を挟んで日本帝国と向き合いその懐柔に成功したことを明らかにした点は、本論文の日本外交史に対する大きな貢献である。また、行政官としての陳儀の優位性とその限界を日本との関わりから論じている点も本論文を際立たせている視角といえよう。

最後に、陳儀の生きた時代を、一次史料に基づき跡付けている点も重要である。もちろん福建省時代や2・28事件に特化した史料分析はこれまでも蓄積されてきたが、本論文では、未公刊の外交文書や台湾国史館の公刊一次史料のほか、日記、書簡、自伝、伝記はもちろん、日本留学時代や福建省時代の史料を渉猟し、日中台にまたがる膨大な史資料の束に照らして立論している。

もちろん、問題がないわけではない。日本語の記述は相当円滑になっているものの、まだ改善の余地はある。陳儀の行った施政の分析において、人事や組織については充実している一方、政策面での分析が比較的弱い。民国期に活躍した他の知日派の政治家・実務家との比較を試みていけば、陳儀の特色をさらに浮かび上がらせ、民国史、日本政治史への含意をさらに豊かにしたに違いない。けれども、これらは今後の課題として、公刊する際に改善することも可能であり、何より博士論文としての価値を損なうものではない。

以上により湯武氏の審査対象論文は一定の完成度と学術的意味を持ち、博士号に値するものと、審査委員一致して判断した。